



薫小だより

「気づき・考え・行動する 薫の子」



郡山市立薫小学校

学校便り No. 3

令和5年 4月24日

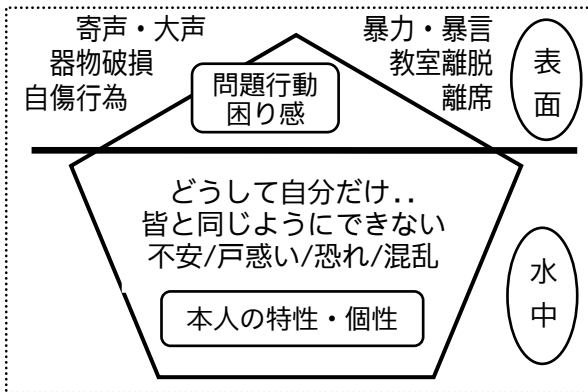
文責：校長 齋藤和彦

特別支援教育の考え方について 「その対象者は全ての児童生徒です」

特別支援教育というと、何か特殊な感じを受けますが、その対象者は学校の全ての児童生徒です。例えば、視力が悪ければメガネやコンタクトを使います。耳が聞こえにくければ補聴器を使います。メガネや補聴器を使う人は特殊な人ではありません。

今、子どもが困っている状態から、生活しやすく・学びやすいようにするのが特別支援教育です。（下の図をご覧ください）

一般に「冰山理論」と言われるモデルです。



学校の中で、子どもが寄声や大声を発することや教室を飛び出すことは度々見られ、問題行動として捉えられます。しかし、大声を出して先生に注意されたい子ども、教室を飛び出して先生に叱られたい子どもはいません。

大声なんか出したくないけど、出してしまうのは、子どもの心のSOSです。

その背景には、常に不安や戸惑いがある、やむにやまれずの行動となっているのです。

一般に言われる「問題行動」を起こす子どもの背景を探り、支援策を講ずるには、保護者と学校との連携（関係機関も）が必要です。

【本当に怖いのは二次障がいです】

問題行動を注意され叱られ続けると、子どもの自己肯定感は下がり、「どうせ僕なんか..」「私ばかり叱られる..」と、二次障がいに陥り、無気力になり、さらに問題行動は複雑化します。そこから自己肯定感を回復させるには長い時間がかかります。そうなる前に適切な支援を行いたいのです。

※ ここまで..宮城小学校 伊藤孝行校長先生の資料を引用させていただきました。

お子さんのことで、ご心配なことがございましたら、お気軽に学校へご相談ください。

◆◆ 校長室より「4/20 夕方の職員室から」 ◆◆

4月20日（木）夕方..学校に電話が入りました。「子どもが遊びに行ったまま、まだ家に帰ってきません。」..ただならぬ教頭先生の電話対応の雰囲気、退勤時刻をだいぶ過ぎて職員室で仕事をしている先生方は、電話対応の言葉に耳を傾けました。事態を確認後、すぐに教頭先生は、一緒に遊んでいた友だちの家庭へ電話確認。私が、「先生方..学校周辺を探しに..」話途中で、職員室から一人残らず先生方の姿が消えました。（速かった！）玄関に向かいながら「私たちは黄色コースを..」「じゃあ、反対側に行くから..」~ベテランの先生の状況把握と迅速な行動、そして、的確な動きの分担が瞬時になされる様（初任の先生方まで先輩を追って出ていきました。先輩の後ろ姿から実践的に学ぶ：また、それを行動で教える・魅せる先輩）に、感謝・感心・感服..尊敬の念を抱いたことを忘れません。先生方が校門を出たか..という頃、「帰ってきました」との電話が入りました。私は、呼び戻しに走りましたが..もう出動後でした（速！）

とにかく、子どもが無事でよかったです。「ご苦労さまでした。ありがとうございました。」（翌日の職員会議で、このことを全職員に周知しました。※薫小職員を誇りに感じます。）

私は、子ども達と同様に、薫小の先生方も守らなければなりません。【薫小だよりNo.2】に関連づけられ、『先生方には、特別頑丈なシートベルトを用意します』=このシートベルトが、保護者皆さんの担任への理解と応援の力もそのひとつであってほしいと願います。「先生..いいですね！」「先生のおかげで、わが子がこんなふうになりました！」保護者からのこんな“よいこと伝達”は、職員力をさらに引き出す原動力【働き方の環境改善】になるにちがひありません。